

〔第28回学術集会 教育講演Ⅱ〕

## 看護実践の事例研究の学術性

東北医科薬科大学

家高 洋

近年、様々な領域で事例研究 (case study) が行われている。医療や教育だけでなく、公共政策、ビジネス等も事例研究の対象となっている。また、事例研究に関して社会学者のFlick (2018) は、質的研究の方法論上の中心的役割を指摘している。

ところで、このように事例研究が着目される理由の1つは、一般的な知がその脱文脈性のために批判されていることに基づいている (Flyvbjerg, 2001)。つまり、一般的な知のみでは様々な具体的状況への適切な対応が困難なのであり、このことは実践に関わる研究でしばしば指摘されている。例えば、看護学ではPolit & Beck (2020) がEvidence-based Practiceにおける個々の患者等への適用可能性 (applicability) の限界と、Practice-based Evidenceの必要性を主張している。

だが、このような問題に対して実践の事例研究 (特にその一事例研究) は直接に答えていないように考えられる。というのは、各々の事例研究の結果をそのまま別の諸事例に適用することはほとんどできないからである。

たとえそうであったとしても、詳細に記述された一事例研究は他の様々な事例に対しても貢献すると臨床心理学者の河合 (2001) は事例研究の重要性を強調する。では、この重要性とは何であるのか。そして、この重要性は、研究を受容した創造していく我々に何を語っているのだろうか。

本講演では河合の主張をより広い見地から検討し、実践の事例研究の学術性について考えてみたい。

### 1. 事例研究と実践について

まず事例研究の特徴について2点指摘しよう。

第1点は一事例研究の目的と特徴である。教育学者のStake (1995) によれば、「我々がある事例を研究するのは、その事例自体が非常に興味深い場合である。我々はその事例の諸文脈と共にその相互作用を詳細に調べる。事例研究は、1つの事例の特殊性と複雑さの研究であり、重要な諸状況のなかでのその活動を理解できるようになる」。

そして、「たとえ一例であっても可能な限り詳しく解明された分析は、不完全な結果を示している多数例の研究よりもずっと価値がある」と生理学者のGoldstein (1995) は主張する。つまり、一事例の詳細な解明が類似の様々な事例の理解を促すのである。

第2点は事例の規定である。社会学者のRagin (1992) によれば、研究者の研究目的、方法、関心、アイデア等によって、研究者は事象を様々なケース化する (casing) ののである。このことは、実践に関する一事例研究に関してもあてはまる。実践について詳細な記述を行う一事例研究であっても、研究者の関心によって実践へのアプローチがかなり異なってくる。

実践に関する一事例研究の論文は主に2つのアプローチに区別される。第1のアプローチは「一連の場面としての事例」に関する研究である。これは、(研究者が観察した) 一連の実践の場面の解明に該当する。このような研究は、現象学的研究やエスノメソドロジー研究に多い。現象学者自身は「事例研究を行っている」とは考えていないだろうが、(文脈に即した) 一事例の詳細な研究であることには違

いはない。

例えば、西村（2012）は、急性期病院における或る看護師の「音」への一連の対応を扱っている。また、田代（2014）は、ICUで丁寧にケアをしている看護師の実践の成り立ちを解明している。いずれの研究も、参与観察とその後のインタビューが方法となっている。

実践に関する一事例研究の第2のアプローチは「出来事としての事例」についての研究である。このような研究は、「1まとまりになりうるような出来事」を取り扱う。すなわち、その事例において幾つかの変転の後に「終結」が生じることが多いため、「1まとまり」とみなされやすいのである。

例えば、土本、野尻、柄澤、他（2021）では、本人への説明が不十分のまま緩和ケア病棟のある病院へ転院となったAYA世代がん患者Aさん（30歳代女性）に対し、本人の意向を尊重しつつ、家族間調整を通して家族の凝集性を高める中で看取りを迎えられた事例における看護実践が解明されている。土本、他（2021）は、事例の劇的な展開とその「終結」のために「物語」とみなすことができるだろう（Bruner / 田中一彦訳, 1998）。

なお、河合（1994）は事例研究の物語性を重視しているので、本講演においては、実践の一事例研究の第2のアプローチの「出来事としての事例」を論じることにする。

## II. 河合らの事例研究論

本節では、まず河合の事例研究論を取り上げ、そして、河合とほぼ同じ発想の発達心理学者の鯨岡とマーケティング学者の石井の議論を紹介する。

### 1. 河合の事例研究論

前述のように河合は、詳細に記述された一事例研究は他の様々な事例に対しても貢献すると主張する。河合（1995）はこの主張を心理療法家向けの講演で次のように説明している。

「登校拒否の子どもの調査をすると、たとえば長男の人に多かったということはある程度の役に立ちますが、私がだれかに会うときにはあまり役に立ちません。ところが、どなたかの事例研究を聞いている場合は、その人がその人の『語り』、クライアントの『語り』と自分の『語り』を戦わせて、できる限り共通のところを語ろうとしておられる、こういう動きが私のなかに起こるわけです。私も聞きながら、じつは自分で語っているのです。皆さんも絶対そうだと思います。事例研究を聞いておられて、のほほんとして聞いている人はないので、みんな自分のなかで何かが動いている。しかも皆さんはそれぞれクライアントをもっておられますから、自分のクライアントとも照合しつつ、みんな心が動いているわけです。

もっと言いますと、不思議なことに登校拒否の事例を聞いているのに、自分の吃音の子どものことと完全に重なることがあります。これはなぜかということ、登校拒否という症状とか吃音という症状を超えて、一個の生きた人間が一個の生きた人間を物語としてどうとらえるのかというふうに聞きますと、すごい普遍性をもってきます。そこで聞いたことは、〔中略〕未来を語っている。つまり、皆さんが次のクライアントに会うときに役立っているのです」

河合は、「詳細な事例研究は、その類似の事例だけでなく、まったく別の事例の実践にも貢献しうる物語としての知であり、独自の『普遍性』を持つ」と述べている。この事態を河合（1994）は次のように記している。

「臨床の知を築く上で極めて重要なことは、主体者の体験の重視であり、その『知』は内的体験を含めたものなのである。従って、その『知』を伝えるときは、事実を事実として伝えるのみでなく、その事実に伴う内的体験を伝え、主体的な『動き（move）』を相手に誘発する必要が生じてくるのである。

内的に生じた動機 (move) は、相手に伝わるとき、そのまま伝わることはないであろう。というのは、それぞれの人が個性を持つので、個性による差が生じるのは当然だからである。しかし、一人の人の心に生じた重要な動機が、他に伝わるとき、伝えられた人は自分のなかで、それを意味あるものとして捉え、それを未来へとつなげてゆくであろう。それは、その人のその後の生き方に影響を与えるはずである」

河合によれば、事例研究における実践者の内的体験の動き (move) は、聞き手や読み手に対して内的な動機 (move) を引き起こし、自らの未来の実践に影響を与える。ここに事例研究独自の「普遍性」, 「間主観的普遍性」(河合, 2001) が働いている。

このような事例研究は個々の実践者に役立つということだけでなく、河合 (1994) にとっては、近代科学的方法論を根本的に見直した方法論なのである。河合は、対人実践に即した新たな科学を構想し、それに応じた「普遍性」を確立しようとしたのであった。

## 2. 鯨岡のエピソード記述論と石井のケース・スタディ論

河合と同様の方法論的検討は、鯨岡 (2005) のエピソード記述においてもなされている。

「1つのエピソードを読み手が『なるほど』と納得できるということは、そのエピソードが書き手の個性に閉じ込められていないということです。客観主義の一般性、普遍性の要請は、研究の手続きに関する要請であり、それが満たされれば、その時点で、読み手がそれをどう受け止めるかには関係なく、一般性、普遍性が『保証』されるというかたちのものです。これに対して、エピソード記述が目指す一般性は、手続きではなく、むしろ読み手の読後の了解可能性、つまり、どれだけ多くの読み手が描き出された場面に自らを置き、『なるほどこれは理

解できる』と納得するか、その一般性を問題にするのだといってもよいでしょう。この意味での一般性、つまり普遍性というよりは公共性という意味での一般性であれば、私たちのエピソード記述も当然それを目指さなければなりません」

以上の主張を鯨岡 (2005) は「一般的・普遍的な事実の提示から、読み手に起こりうる可能的真実の提示へ」とまとめているが、これは「読者に内的な動機を引き起こす」と述べる河合と同様の主張だろう。

このような主張は、石井 (2009) の「当事者の視点に立って、その当時の状況を読み解いていくスタイルの新しいケース記述」にも該当する。

河合と同様に詳細な記述を提起する石井 (2009) は、この新しいケース記述について「他のケースとの比較参照は難しい」が、「当事者の視点から見た現実の動態を理解するというプロセスを通じて、当事者の体験を追体験するとともに、自身の問題に照らし合わせて『深い腹に落ちた理解』を得ることができる」と述べている。

そして、ケースの「プロセス記述から何かを得ようとする人にとっては、自分の問題として丁寧に読み、『自分なら、その場合どうするか』と創造的な思考や連想をたくましくすることが重要だ。その中で、自分にとってかけがえのないケースの価値が見えてくる」と石井 (2009) は指摘する。事例の理解が読者自身の未来の事例に関わってくるということも河合と同様だろう。

ところでFlick (2018) によれば、「量的研究での質の向上の主な目的は標準化と或る種の抽象化である一方、質的研究の主な目的は多様性、柔軟性、具体性であり、バイアスや影響を除くのではなく、研究の諸場面に関する知的潜在力 (knowledge potential) を拡げることにある」。

河合らの研究も読者の「知的潜在力を拡げる」ことに関わっている。そして、前述の通り、河合らの目的は、近代的な自然科学とは異なる実践に即した科

学を確立することであり、社会学者のFlyvbjergも同様の見解を主張している。Flyvbjerg (2001) によれば、社会に関する一般的な法則のみによっては社会の具体的な種々の営みを捉えられない以上、個々の事例研究を遂行すべきなのである。このように、幾つもの学問領域で事例研究の重要性が指摘されている。

### Ⅲ. 実践の事例研究に関する思考の様式について

本節では思考の様式 (mode) という観点から事例研究を検討する。

心理学者のBruner (田中一彦訳, 1998) によれば、人間の思考あるいは認知機能には2つの様式があり、それぞれが独自の仕方では経験を整理し現実を構築している。そしてこれらの2つの様式はお互いに還元されず、検証や説得の仕方も異なっている。

第1の思考の様式は「的確な論証 (a well-formed argument)」である。この様式の検証や説得は、その「真理 (truth)」に依拠する。この様式の代表例は近代の自然科学である。

第2の思考の様式は「素晴らしい物語 (a well-wrought story)」である。この様式の検証や説得は、その「迫真性 (verisimilitude, lifelikeness)」に依拠する。この様式には文学だけでなく、神話や歴史も含まれており、Brunerは明言していないが、詳細な記述の事例研究もこの様式に属するであろう。

Bruner (田中一彦訳, 1998) によれば、物語は「人間等の意図と行為、そしてそれらの成り行きを示す変転と帰結」を扱っている。Bruner (田中一彦訳, 1998) は物語における意図の変転を重視するが、これは実践に関する事例研究にも該当する。というのは、実践を理解し納得するためには、実践者の具体的な意図の把握が欠かせないからである。

ところで、「1つのエピソードを読み手が『なるほど』と納得できるということ」(鯨岡, 2005) は、上記の物語の「迫真性」によると考えられる。そして、Brunerの「迫真性」には、河合 (1994) の

「主体的な『動き』を相手に誘発する」ということも含まれるだろう。

このような「迫真性」は、石井 (2009) の「棲み込む (dwell in)」<sup>1</sup> というアプローチとかなり類似している。「当事者の体験を追体験するとともに、自身の問題に照らし合わせて『深い腹に落ちた理解』を得ることができる」(石井, 2009) ということとは、石井によれば、その事例に「棲み込む」ということなのである。

事例に棲み込むことによって、読者は納得し、触発され、時としてその事例から洞察を得る。すなわち、読者を惹きこみ、触発するような記述によって、読者の中に何かが残し、読者の未来が変わっていく。では、どのようにして読者を事例に棲み込ませるように記述すればよいのだろうか。紙幅の関係もあり、以下その要点を列挙することに留める。

- ・実践者を取り巻く状況の困難さを解きほぐす記述
- ・実践者の意図や思考、感情ならびに状況についての詳細な記述
- ・事例の経過における偶然事の記述
- ・読者のイメージを膨らませ、事例に入りやすくするメタファーの使用
- ・実践者の特徴的な実践や特徴的な状況を記述する際に (他にも当てはまるような) 一般的な用語や概念に依拠し過ぎない
- ・実践者と患者等の相互性の記述 (因果的な関係性で事例の展開を説明し過ぎない) 等

なお、石井 (2009) は、因果関係を明らかにするような事例記述の長所と短所を次のように述べている。「要因に分けることで、現象の背後に潜んだ因果の構造を明瞭に把握できるメリットはあるにしても、注意しないと、挙げられた要因の間の関係が出来上がるまでに当事者が直面したはずの多様な選択肢、そこでなされた判断、あるいはそこに働いたであろう天の配剤のような偶然の契機が隠れてしま

<sup>1</sup> この「棲み込む」ことの典拠は、Polanyi (高橋勇夫訳, 2003) である (石井, 2009)。

う」。当事者におけるこのような未確定な事態の記述こそが読者を事例に棲み込ませ、読者がその事例に自分なりの意味を与える余地を作り出すのである (Bruner, 田中一彦訳, 1998)。

#### IV. 実践の事例研究の学術性と問題点

ところで、実践に関する一事例研究の手順は、基本的に他の質的研究と変わらない。ここでは論文作成に関する基準とその方略について3点を指摘する。

- ①データの収集や生成に関する信用性 (Credibility)  
方略：(研究目的に即した) インタビューの時間と内容／複数データの使用／インタビューの環境や状況への配慮／メンバー・チェック等
- ②記述と解釈に関する適正性 (Appropriateness)  
方略：記述の迫真性／解釈の整合性／ネガティブ・ケースへの対処／解釈等の用語の適切さ／メンバー・チェック／ピア・デブリーフィング等
- ③論文の重要性 (Relevance) / 有用性 (Usefulness) / 創造性 (Creativity)  
方略：外部者によるピア・デブリーフィング (可能であれば複数回行う) / メンバー・チェック等

ところで、研究の学術性の前提は、その研究目的の正しさと重要性である。そして、この前提が承認された上で、研究が適切に遂行され、研究成果の学術的な意義が認められるならば、研究の学術性も認められるだろう。

河合の事例研究論の目的は、近代科学と異なる事例研究の科学性 (「間主観的普遍性」) の確立である。読者が論文を正確に理解することよりもむしろ、読者に何らかの動き (move) を引き起こすことを河合は事例研究の醍醐味とみなした。このような河合の主張は、鯨岡や石井、そしてFlyvbjergも同意するだろう。それゆえに、河合の事例研究の目

的の学的意義は認められうるのではないだろうか。

他方、河合の事例研究には重大な問題点がある。それは、事例研究の読者の反応の客観的な確証が難しいということである (河合, 2001)。このことは、事例研究の目的 (読者に何らかの動きを引き起こすこと) が果たされているかどうかを判明でないということでもある。

この懸念に対しては、事例の記述の仕方に配慮した対処が考えられる。例えば、(メタファーの使用も含む)「迫真性」を備えた記述や、(実践の卓越性等の) その実践独自の特徴の記述が挙げられる。もちろん、これらの対処によっても読者全員に同じような動き (move) を引き起こさせることは生じないであろうが、特徴のある実践を伝えるという目的を満たすことはできるだろう。

また、過去の実践の言語化も難しい問題点である。これに関しては、実践者のその都度の意図を中心に実践を再構成するという対処が考えられる。このアプローチでも実践の細かな状況等は十全に言語化できないであろう。しかし、実践者の意図の解明には必ず実践の状況の解明が含まれている。このような状況を様々な記録や集中的なインタビュー等によってさらに明らかにすることで、実践の再構成は (ある程度) 可能であると考えられる。

以上のように、河合の「間主観的普遍性」の確立はいまだ途上にある。我々は様々な事例研究を行いつつ、「間主観的普遍性」に即した方法とその評価基準等を提起していかなければならないであろう。

#### 文 献

- Bruner, J.: *Actual Minds, Possible Worlds*. Harvard University Press, Cambridge, Mass / 田中一彦訳, 可能世界の心理, みすず書房, 東京, 1998
- Flick, U.: *Managing Quality in Qualitative Research* (2nd ed.), Sage, London, 2018
- Flyvbjerg, B.: *Making Social Science Matter: Why social inquiry fails and how it can succeed again* (translated by S. Sampson), Cambridge University Press, Cambridge, 2001
- Goldstein, K.: *Der Aufbau des Organismus*. Martinus Nijhoff, The Hague, 1995

- 石井淳蔵：ビジネス・インサイト—創造の知とは何か，岩波書店，東京，2009
- 河合隼雄：心理療法序説—河合隼雄著作集3 心理療法：3-222，岩波書店，東京，1994
- 河合隼雄：物語と人間の科学—河合隼雄著作集12 物語と科学：3-198，岩波書店，東京，1995
- 河合隼雄：事例研究の意義，臨床心理学，1 (1)：4-9，2001
- 鯨岡 峻：エピソード記述入門—実践と質的研究のために，東京大学出版会，東京，2005
- 西村ユミ：「音」の経験と看護実践の編成，現象学年報，28：1-11，2012
- Polanyi, M.: The Tacit Dimension. The University of Chicago Press, Chicago / 高橋勇夫訳，暗黙知の次元，筑摩書房，東京，2003
- Polit, D. F. & Beck, C. T.: Nursing Research: Generating and Assessing Evidence for Nursing Practice (11th ed.), Wolters Kluwer, Philadelphia, 2020
- Ragin, C. C.: "Casing" and the process of social inquiry." What is a Case?: Exploring the Foundations of Social Inquiry [edited by Ragin, C. C. & H. S. Becker, H. S.], Cambridge University Press, Cambridge : 217-226, 1992
- Stake, R. E.: The Art of Case Study Research, Sage, Thousand Oaks, 1995
- 田代幸子：集中治療室看護師の実践の意味，看護研究，49 (7): 611-622, 2014
- 土本千春，野尻清香，柄澤清美，他：自分を伝えないAYA世代終末期患者の残された「今」を支えた看護—語りあえない家族をゆさぶる，家族看護学研究，26 (2): 188-200, 2021